



留岡 幸助

とめおか こうすけ
1864~1934

岡山県高梁市で生まれ育った留岡は、或る日寺子屋の帰りに武士の子供にいじめられている町人の子を助けようと相手に噛みつく。怒った武士の家では、幸助の父親から買っていた米・みそ他すべて買い取ることを停止する。その上、幸助の父親を木刀で打ち、出入禁止にする。そのことを知る、それでも父は商人だから謝りに行こうという。幸助は、武士が威張る士農工商制度に子供ながらも義憤を感じた。

その後、青年時代に“人間は皆平等である”とのキリスト教の教えを聞いて、明治時代の同志社に入学、卒業後は霊南坂等の牧師を経て“私は開拓に行くのではない、心の開拓に行く”と北海道に渡る。そこで監獄の教諭師となり、囚人へのあまりにも酷い仕打ちに義憤を感じ、監獄改良を呼ぶ。その頃、空知集治監では、重罪犯二千人を収容し、強制労働など過酷な刑罰を受ける囚人達。幸助は、なんとか囚徒を更生させ、監獄を改革しようと、三年に渡って囚徒の過去を調査する。そして、犯罪の芽は幼少期に発することを知り、幼い頃の家庭教育の大切さに気づく。また、幼き日の友人が、犯罪者になっていたことも少年感化に従事する遠因となる。

幸助は教諭師を辞めると、米国に渡り二年をかけて欧米の監獄事情を学ぶ。そして帰国後、少年感化を実現すべく、北巢鴨の一角に「家庭学校」を作り、広く感化を要する子弟を教育、少年感化事業の先駆者となる。後に巢鴨の地が都会的になると、ルソーの著書「子供を育てるには大自然の中が一番」という説に感銘を受け、北海道・遠軽の地に家庭学校を作る。その教育は、21世紀となった今もお受け継がれ、その地は留岡という地名になって現在に至っている。

留岡幸助語録

「学校に行ったからといって英雄豪傑ができるわけではありません。君子になるか、盗賊になるかは家庭の陶冶（とうや=教育）によるのであります。それなのに今の家庭は下宿屋にすぎません。」

「教えんとするものは、自ら教えられなければならぬ。」

「教育上一番大切なのは家庭である。次に大切なのは学校と社会である。人の子を教育する最も適当な場所は、地球上どこか？オックスフォードか、ハーバードか、エールか、ベルリンか？人間を良くする基本は家庭にある。」

「教養のある慈母が子どもの教育者としては一番。無教養なる慈母でもよい。」

「我が国の教育は情味がたらぬ、情味がたらぬということは、色々な悪結果を生む。学校さえやれば子供は良くなると思っている親。学校が二分で、家庭が八分なのだ。」